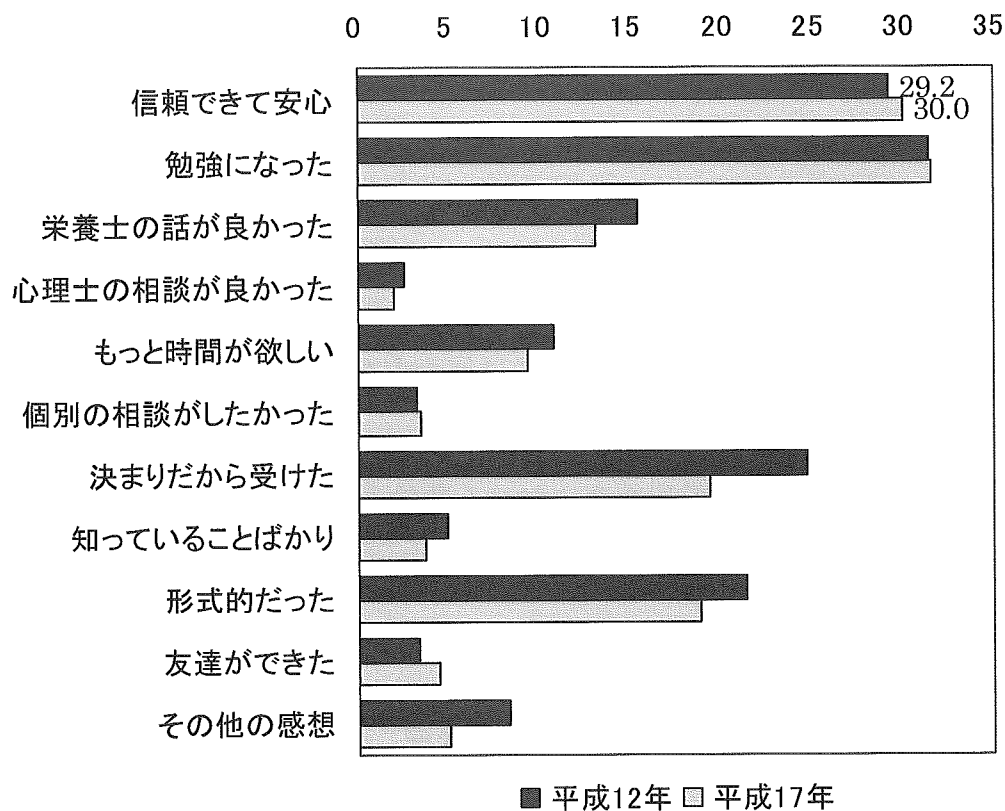


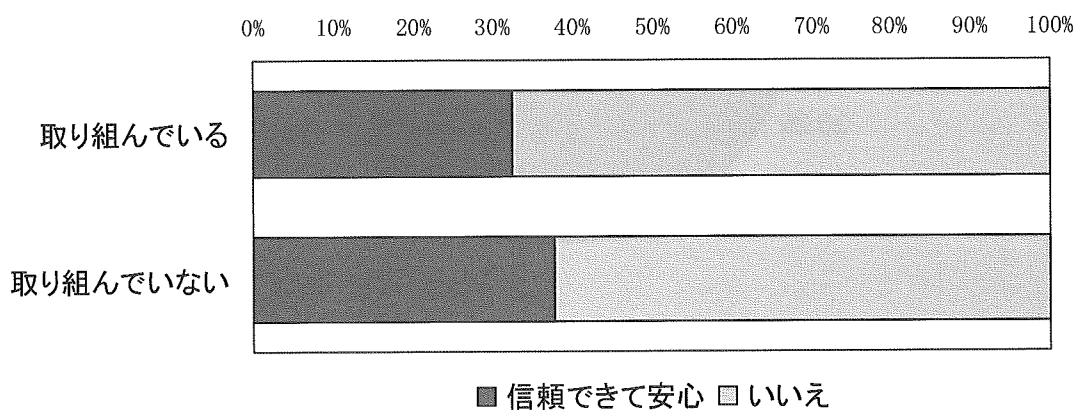
「信頼できて安心」とこたえた母親は、1歳6か月で32.4%、3歳児で30.0%と平成12年の値（1歳6か月で30.5%、3歳児で29.2%）とほぼ同じであった。

保健センターなどでの健診の感想の推移(3歳児)



育児支援に重きを置いた健診に取り組んでいる自治体とそうでない自治体で、健診に対する母親の感想を比較したが、取り組んでいる自治体で健診を受けた母親では、健診が「信頼できて安心」と答えた者が少なかった。

自治体の育児支援に重きを置いた健診と母親の感想(3歳児)



BCG接種を済ませましたか。

(母子健康手帳で確認してください)

1. はい      2. いいえ



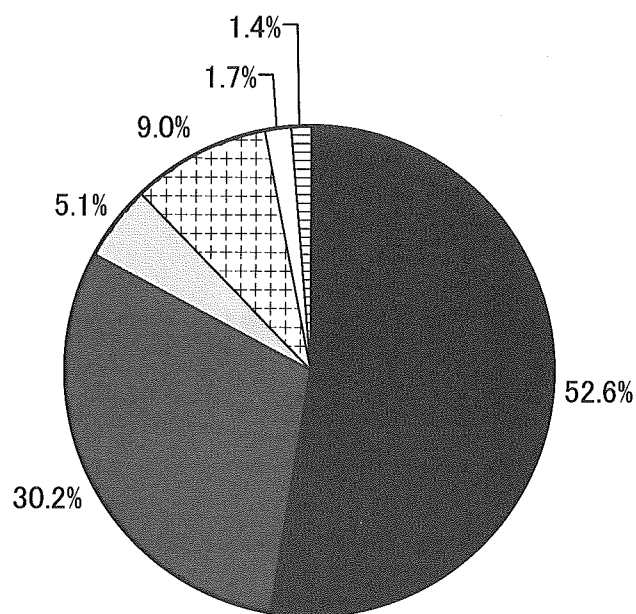
接種したのはいつですか。

1. 生後6か月以内      2. 6か月～1歳  
3. 1歳以降

1歳までにBCG接種を終えていたのは、92.3%で（無回答および接種時期が不明の者を除いて算出），目標値である95%には届かなかったものの，平成12年の値である86.3%を上回っていた。

予防接種状況については，健康診査における問診よりも予防接種台帳などにより，1歳までの接種完了者の割合を正確に把握することが望まれる。

BCGの接種状況



■ 生後6ヶ月以内 ■ 6ヶ月～1歳 □ 1歳以降 ▨ 接種時期不明 □ 未接種 ▩ 無回答

三種混合の予防接種（I期3回）を済ませましたか。

1. はい    2. いいえ



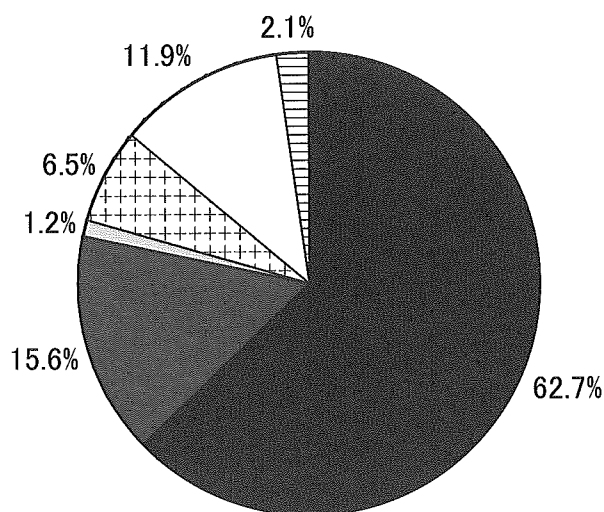
I期3回が済んだのはいつですか。

1. 1歳まで    2. 1歳～1歳6か月  
3. 1歳6か月以降

1歳半までに三種混合のI期3回を終えていたのは85.7%で、平成12年の値である87.5%を少し下回っていたが、平成12年の値の対象者が1歳6か月から2歳までの児であることを考慮すれば、接種率が低下した訳ではないと考えられる。

予防接種状況については、健康診査における問診よりも予防接種台帳などにより、1歳6か月までの接種完了者の割合を正確に把握することが望まれる。

三種混合の接種状況



■ 1歳まで ■ 1歳～1歳6ヶ月 □ 1歳6ヶ月以上 ▨ 接種時期不明 □ 未接種 ▩ 無回答

麻疹（はしか）の予防接種を済ませましたか。

1. はい      2. いいえ

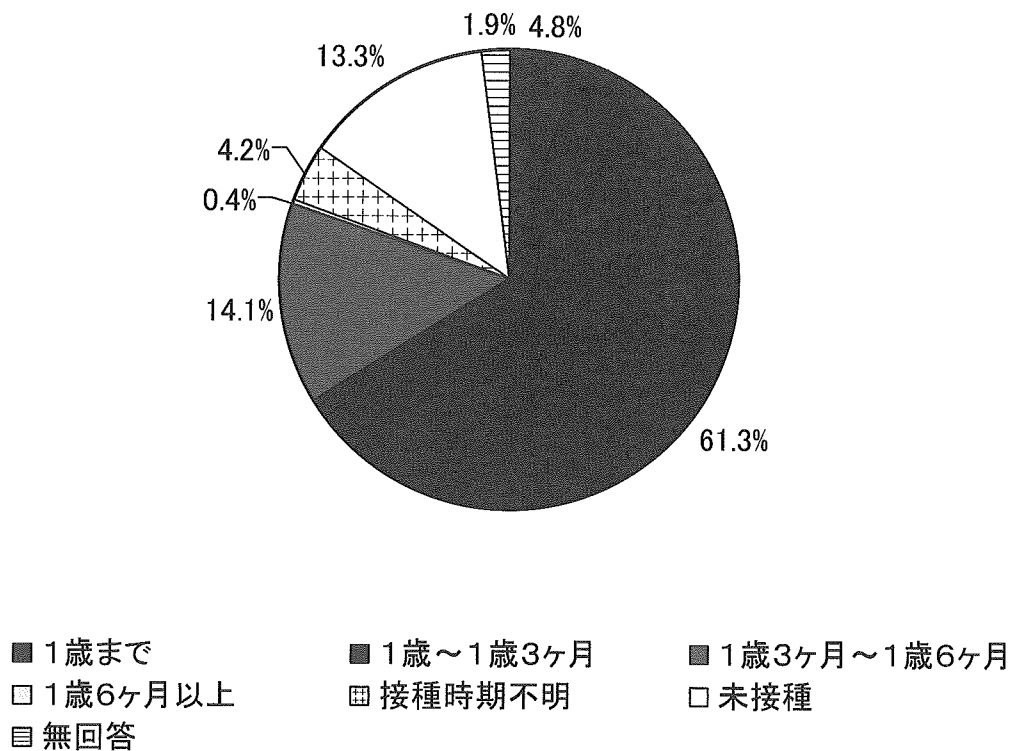


接種したのはいつですか。

1. 1歳まで                      2. 1歳～1歳3か月まで  
3. 1歳3か月～1歳6か月      3. 1歳6か月以降

1歳半までに麻疹の予防接種を終えていたのは85.4%で、平成12年の値である70.4%を大きく上回り、日本小児科医会をはじめとする各種団体や自治体の予防接種率向上の取り組みの成果と考えられた。

麻疹の接種状況



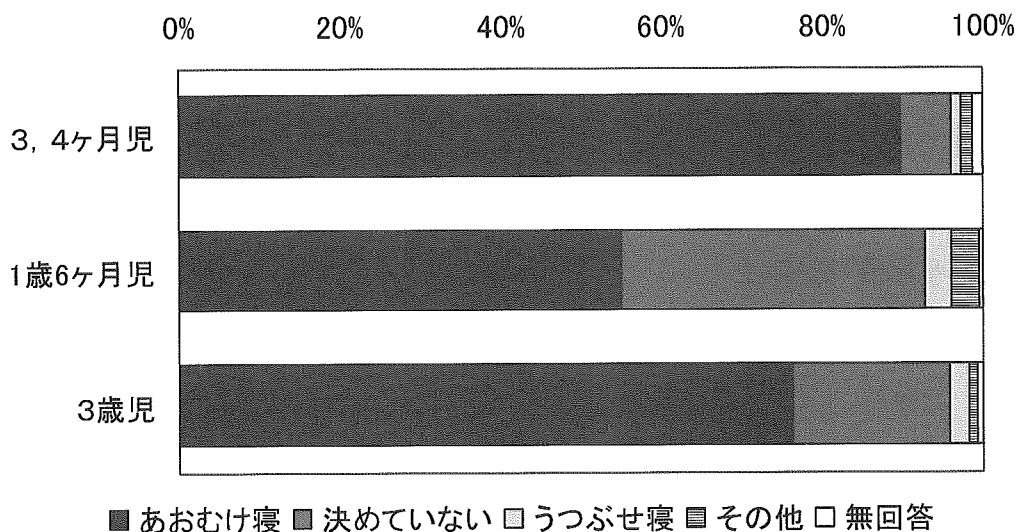
1歳のお誕生日までお子さんを寝かせ始める時は、  
どのように寝かせていましたか。

1. あおむけ寝
2. うつぶせ寝
3. 決めていない
4. その他( )

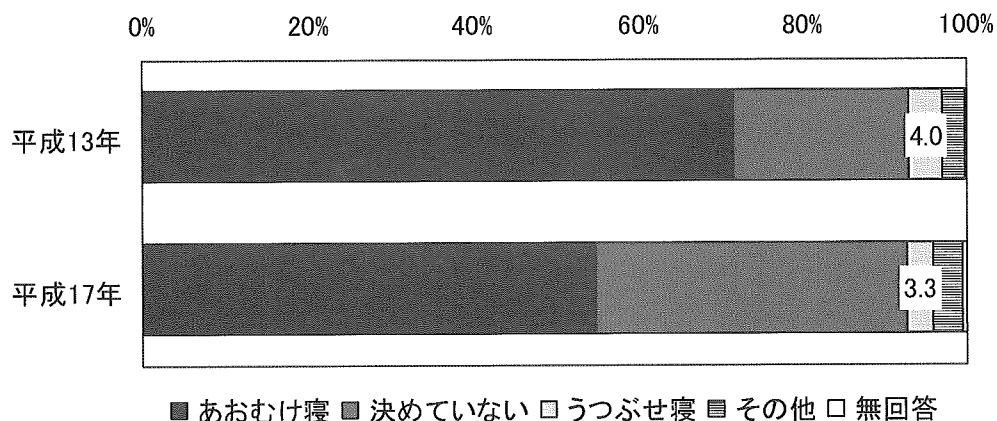
乳幼児突然死症候群のリスクであるうつぶせ寝の状況を把握するための設問。

1歳までの寝かせつけ方として、うつぶせ寝をさせているのは、3, 4か月児で1.2%、1歳6か月児で3.3%、3歳児で2.4%であった。平成12年の値(1歳6か月児で4.0%、3歳児で3.5%)との比較では、いずれもわずかに改善していた。

1歳までの寝かせつけ方



1歳までの寝かせつけ方の推移(1歳6か月)



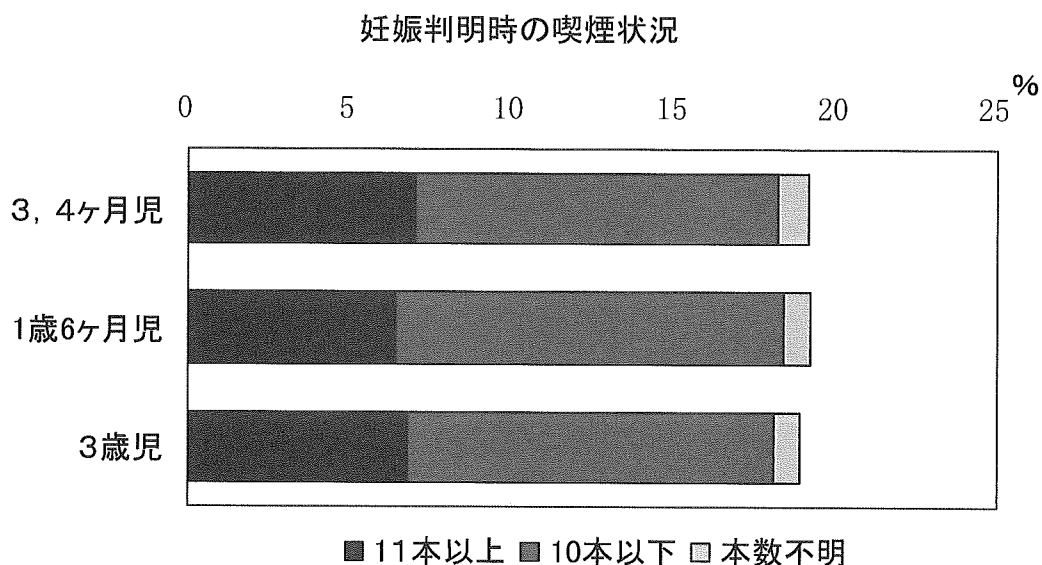
妊娠しているとわかった時のあなた（お母さん）の喫煙は  
どうでしたか。

1. な し      2. あ り（1日      本）

思春期保健  
行動の指標

妊娠判明時の喫煙率は思春期における喫煙対策の指標である。高校生などを対象とした喫煙状況の調査が要因ではない中、未成年者の喫煙対策の効果を判定する指標として妊娠判明時の喫煙率は重要な指標である。

妊娠判明時に喫煙をしていた母親は、3, 4か月児で19.2%、1歳6か月児で19.2%、3歳児で18.9%と、いずれの月齢も19%前後であった。



妊娠中のあなた（お母さん）の喫煙はどうか。

1. なし 2. あり（1日 本）

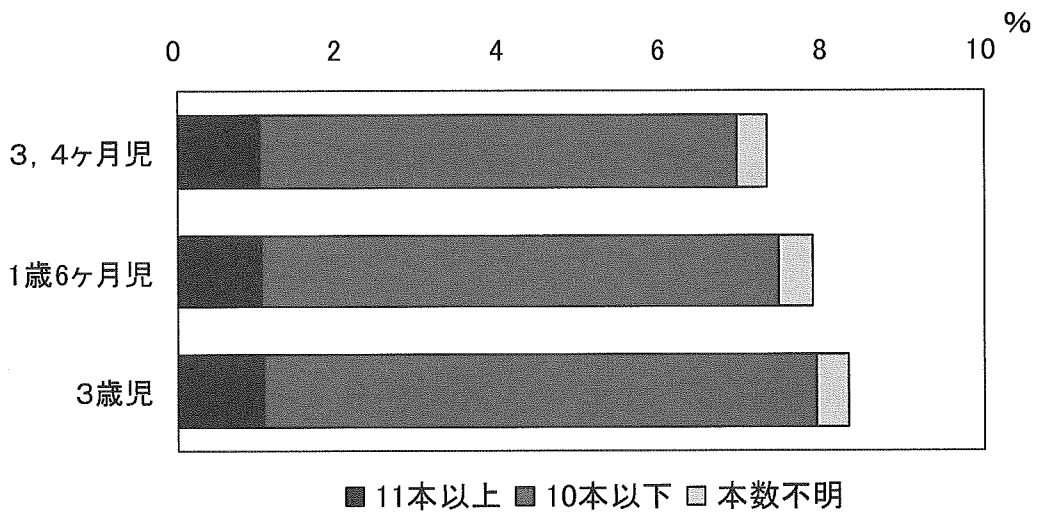
保健医療  
行動の指標

妊娠中の喫煙は低出生体重児のリスク要因である。低出生体重児の割合が増加する中、妊娠中の喫煙率の減少は重要な目標である。

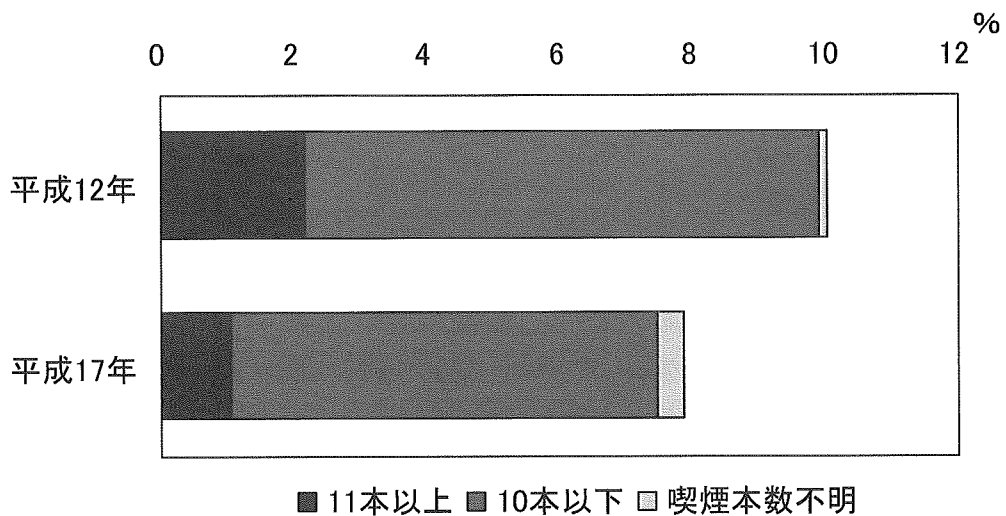
妊娠中に喫煙をしていた母親は、3，4か月児で7.3%，1歳6か月児で7.9%，3歳児で8.3%と、いずれの月齢でも平成12年の値である10.0%を下回っていた。

妊娠判明時の喫煙率との比較から、半数以上の妊婦が妊娠判明後に禁煙していると考えられる。

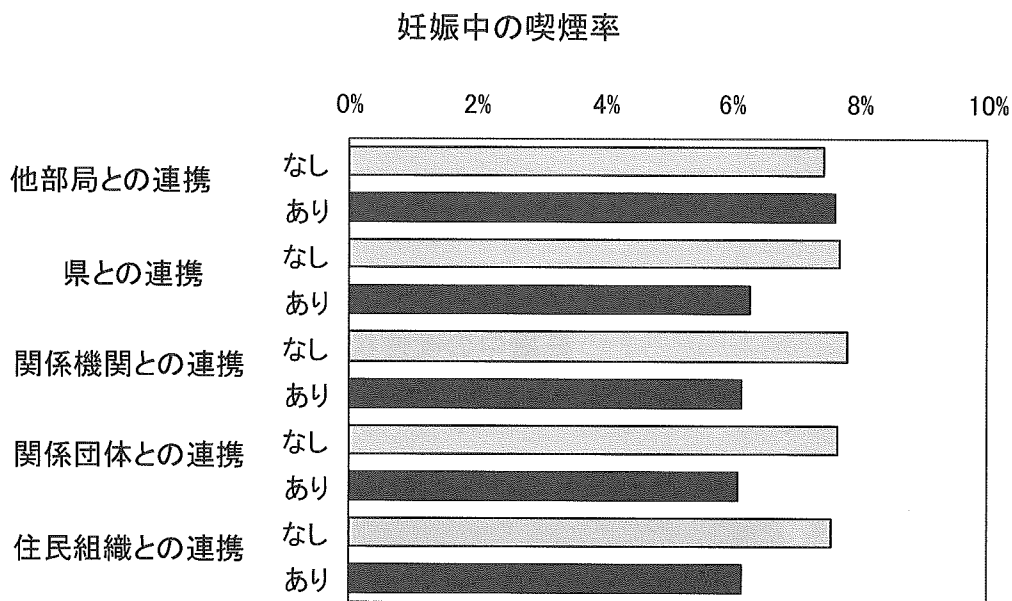
妊娠中の喫煙状況



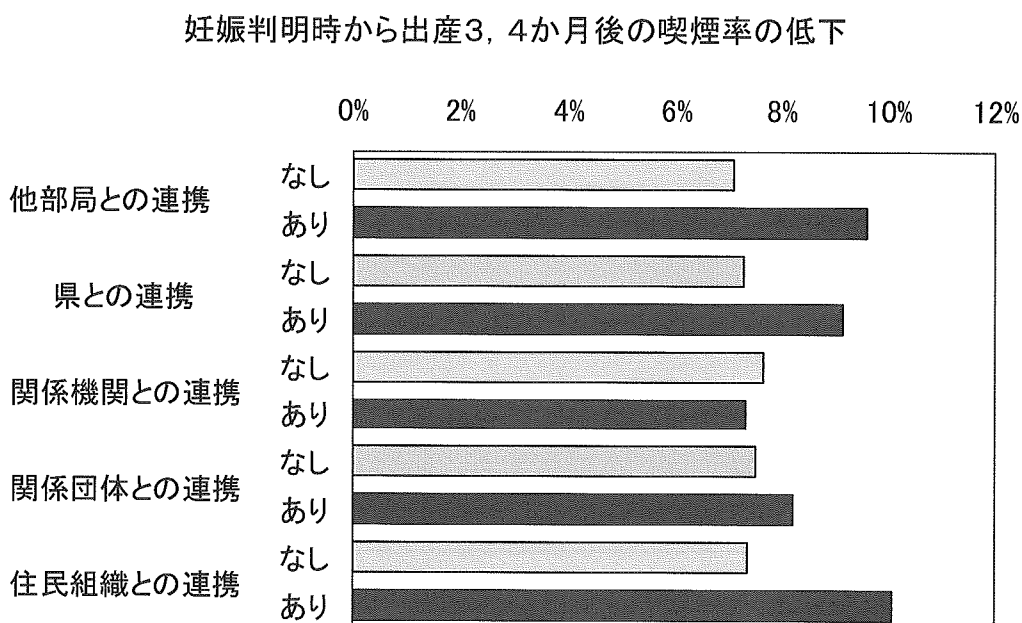
妊娠中の喫煙率の推移（1歳6か月）



自治体の妊娠中の喫煙対策の有無と喫煙率の分析では、県と連携をして取り組んでいる自治体、医療機関などの関係機関と連携して取り組んでいる自治体、助産師会などの関係団体や住民組織と一緒に取り組んでいる自治体では、妊娠中の喫煙率が有意に低くなっており、取り組みの効果が認められた。



同様に自治体の喫煙対策の有無による妊娠判明時から出産3、4か月後の喫煙率の低下率の分析では、他部局との連携、県との連携、住民組織との連携で取り組んでいる自治体で、喫煙率の低下が有意に大きかった。





### あなた（お母さん）の現在の喫煙

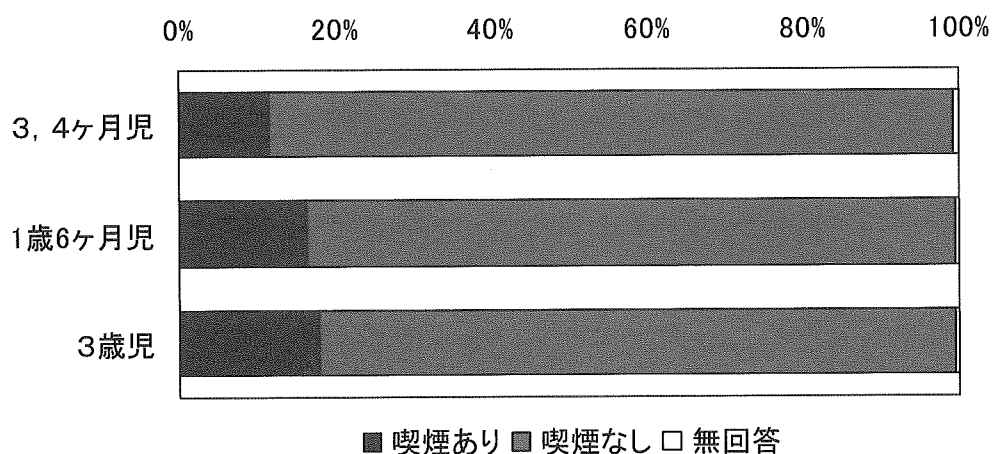
1. なし      2. あり（1日      本）

保健医療  
行動の指標

育児期間中の母親の喫煙は乳幼児突然死症候群（SIDS）のリスク要因であるだけでなく、子どもの喘息や気管支炎といった呼吸器疾患のリスク要因である。

現在、喫煙をしている母親は、3, 4か月児で11.5%、1歳6か月児で16.5%、3歳児で18.1%と、児の月齢が上がるほど、母親の喫煙率が高くなっていった。平成12年の値である22.3%よりは低くなっているものの、妊娠中に禁煙した母親も出産後は徐々に喫煙を再開していると考えられた。

#### 現在の母親の喫煙状況



### 夫（お父さん）の現在の喫煙

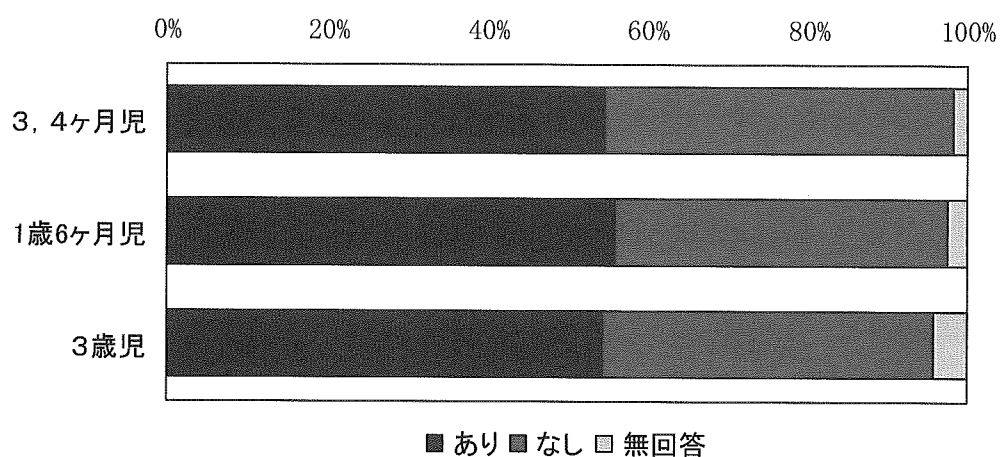
1. なし    2. あり（1日    本）

保健医療  
行動の指標

育児期間中の父親の喫煙は乳幼児突然死症候群（SIDS）のリスク要因であるだけでなく、子どもの喘息や気管支炎といった呼吸器疾患のリスク要因である。

現在、喫煙をしている父親は、3, 4か月児で54.9%、1歳6か月児で55.9%、3歳児で54.5%と、いずれの月齢でも55%前後であり、平成12年の値である52.2%より高くなっていた。

現在の父親の喫煙状況



妊娠しているとわかった時のあなた（お母さん）の飲酒は  
どうでしたか。

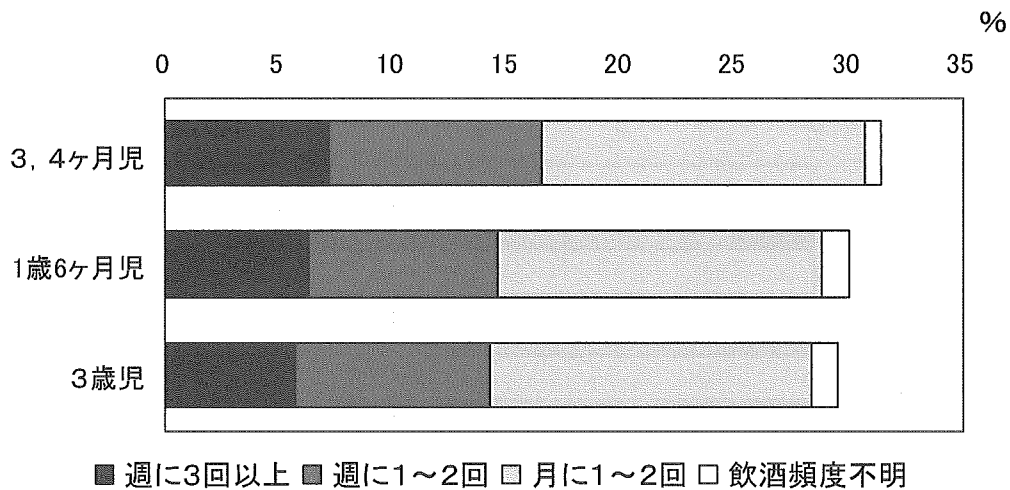
1. なし      2. あり



1. 月に1～2回      2. 週に1～2回      3. 週3回以上

妊娠判明時に飲酒をしていた母親は、3, 4か月児で31.4%、1歳6か月児で30.0%、3歳児で29.5%と、いずれの月齢も30%前後であった。飲酒頻度としては、月に1～2回がその半数を占めていた。

妊娠判明時の飲酒状況



妊娠中のあなた（お母さん）の飲酒はどうか。

1. なし    2. あり

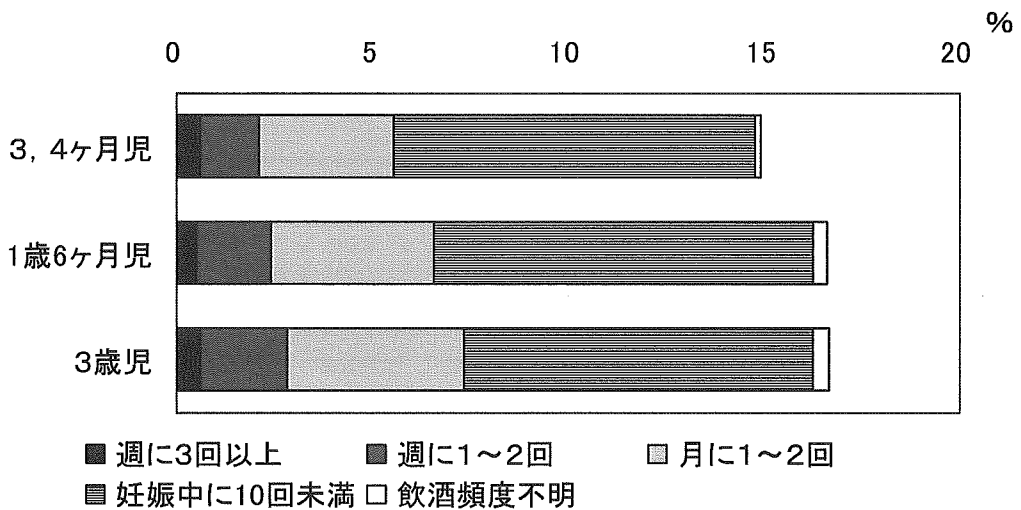


1. 妊娠中に10回未満    2. 月に1~2回  
3. 週に1~2回    4. 週3回以上

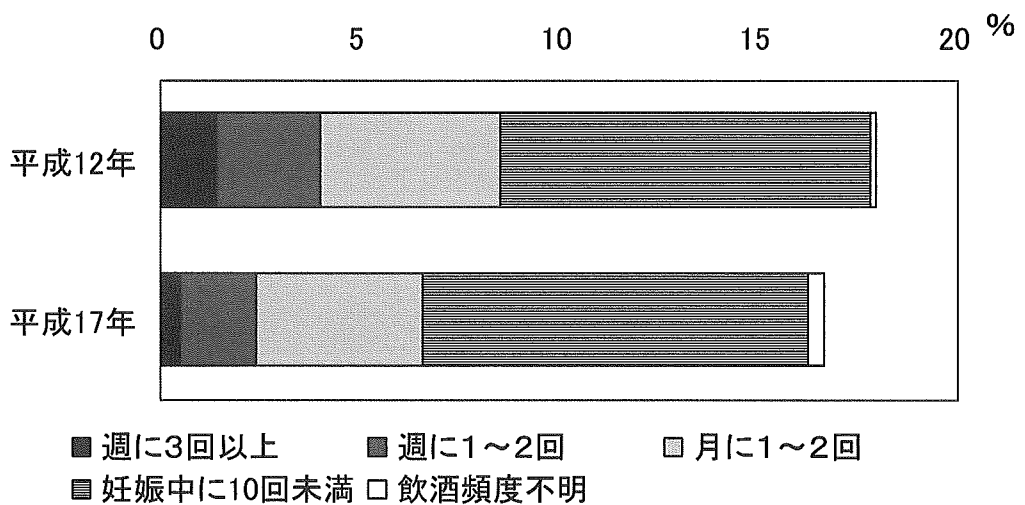
保健医療  
行動の指標

妊娠中に飲酒をしていた母親は、3, 4か月児で14.9%、1歳6か月児で16.6%、3歳児で16.7%と、いずれの月齢も15%前後で、平成12年の値である18.1%より減少していた。飲酒頻度としては、妊娠中に10回未満が飲酒者の6割を占めていた。

妊娠中の飲酒状況



妊娠中の飲酒状況の推移（1歳6か月）



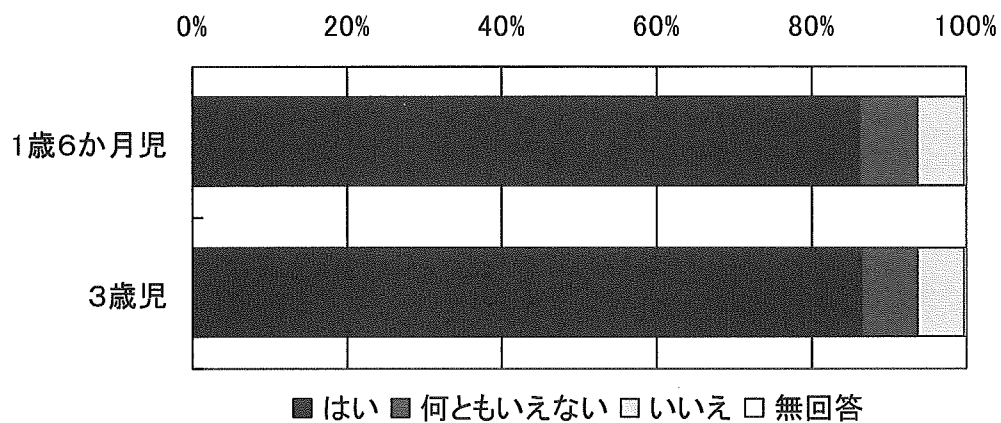
かかりつけの医師はいますか。

1. はい      2. いいえ      3. 何ともいえない

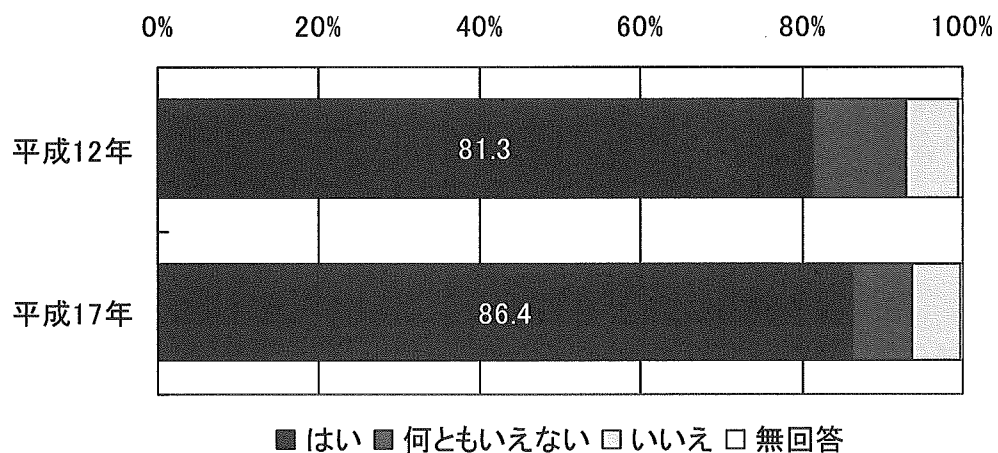
保健医療  
行動の指標

かかりつけ医を持っているのは、1歳6か月児で86.3%、3歳児で86.4%と、ベースライン値（1歳6か月児で80.7%、3歳児で81.3%）よりも5ポイントほど高くなっていた。

かかりつけ医の有無



かかりつけ医を持つ割合の推移（3歳児）



休日や夜間にお子さんが急病の時、診察してもらえる医療機関を知っていますか。

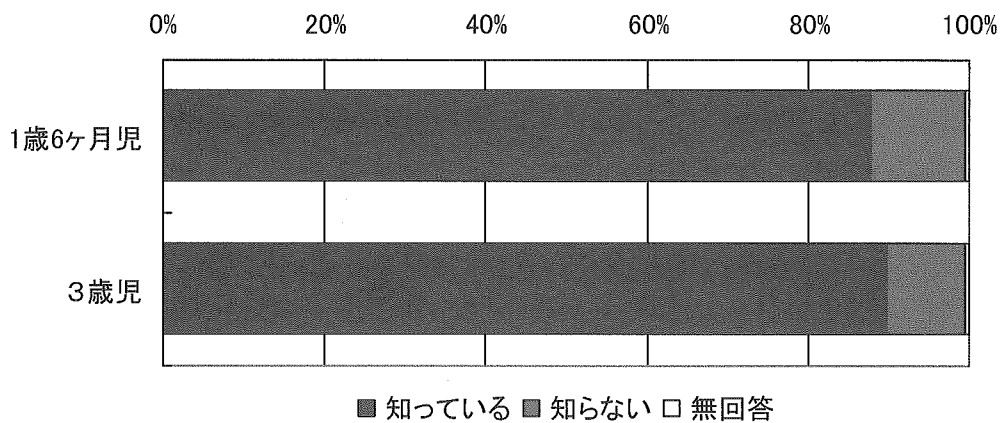
保健医療  
取組の指標

1. 知っている    2. 知らない

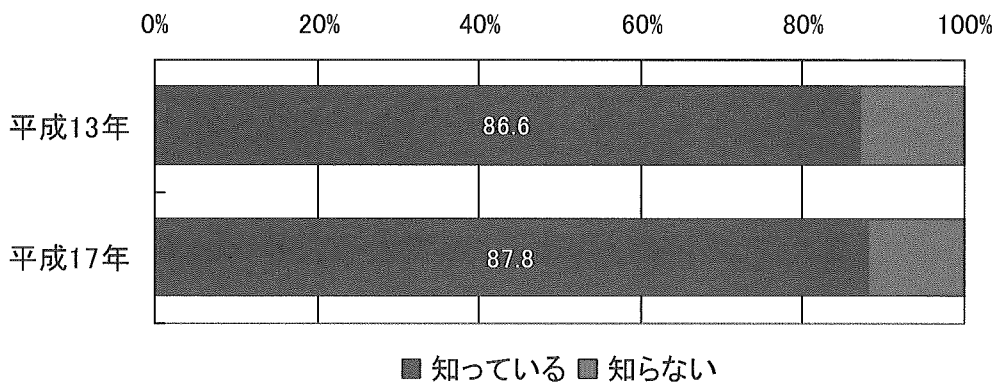
救急医療体制の整備がどれくらい進んでいるかを評価する指標である。

休日や夜間に診察をしてもらえる医療機関を知っていると答えた母親は、1歳6か月児で87.8%，3歳児で89.9%と、平成13年の値とほぼ同様であった。

休日や夜間の医療機関を知っているか



休日や夜間の医療機関を知っているものの割合の推移  
(1歳6か月児の親)



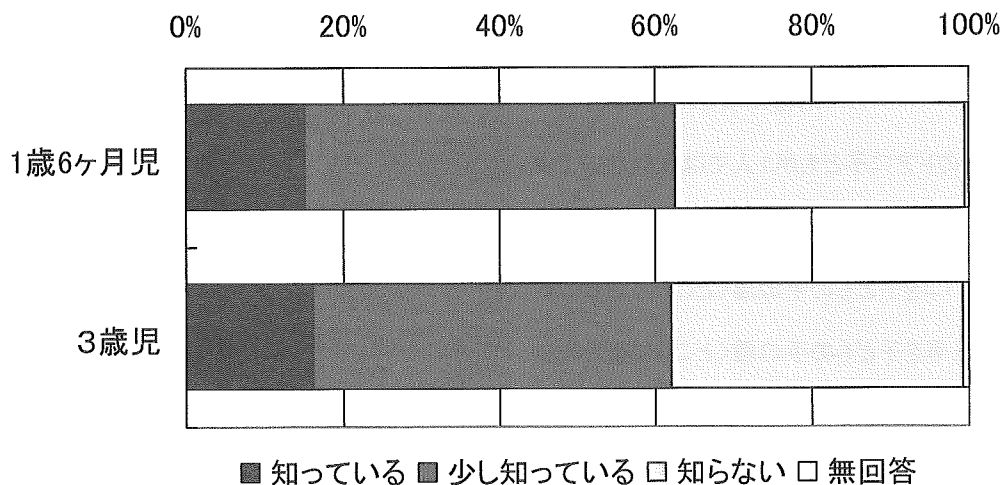
あなたは心肺蘇生法(心臓マッサージなどの救急処置)を知っていますか。

1. 知っている 2. 少し知っている 3. 知らない

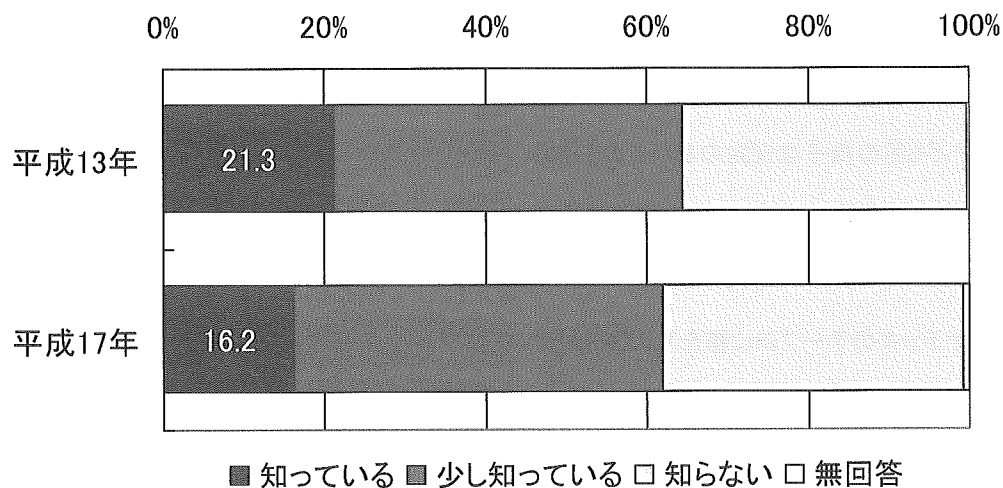
保健医療  
取組の指標

心肺蘇生法を知っていると答えた母親は、1歳6か月児で15.3%、3歳児で16.2%と、ベースライン値(1歳6か月児で19.8%、3歳児で21.3%)よりも5ポイントほど低くなっていた。「少し知っている」を加えると60%を超え、ベースライン値とほぼ同レベルになるが、心肺蘇生法は「少し知っている」程度では役にあまり立たないことから、心肺蘇生法についての普及啓発がさらに必要と考えられた。

心肺蘇生法を知っているか



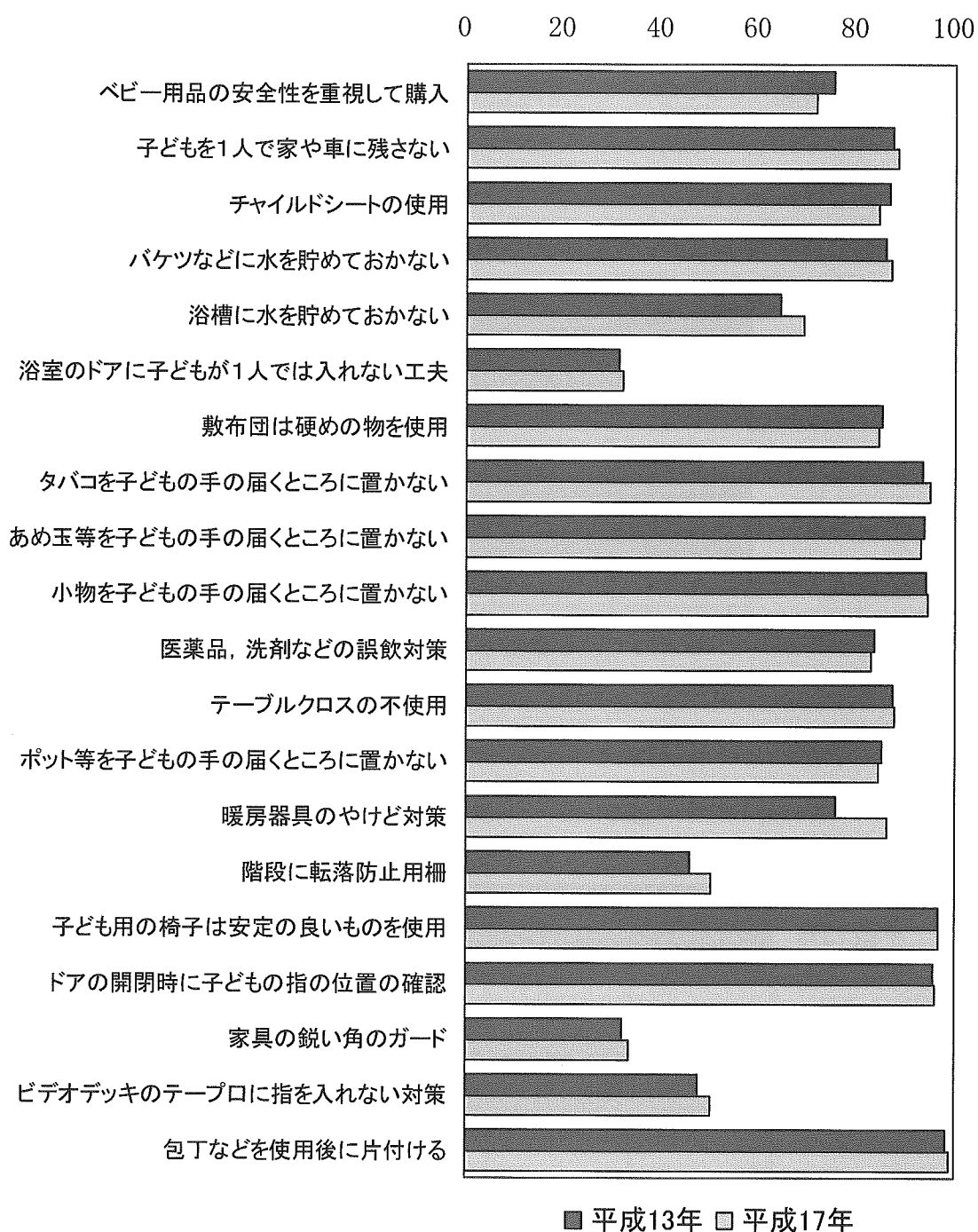
心肺蘇生法を知っている親の割合 (3歳児)



## 事故対策の実施状況（1歳6か月児）

20項目からなる事故対策の実施状況を回答してもらったが、平成13年の調査結果とほぼ同様であった。平成13年と比較して改善していたのは、暖房器具のやけど対策と浴槽に水をためておかないという溺水対策であった。

### 事故対策の実施状況の推移（1歳6か月）

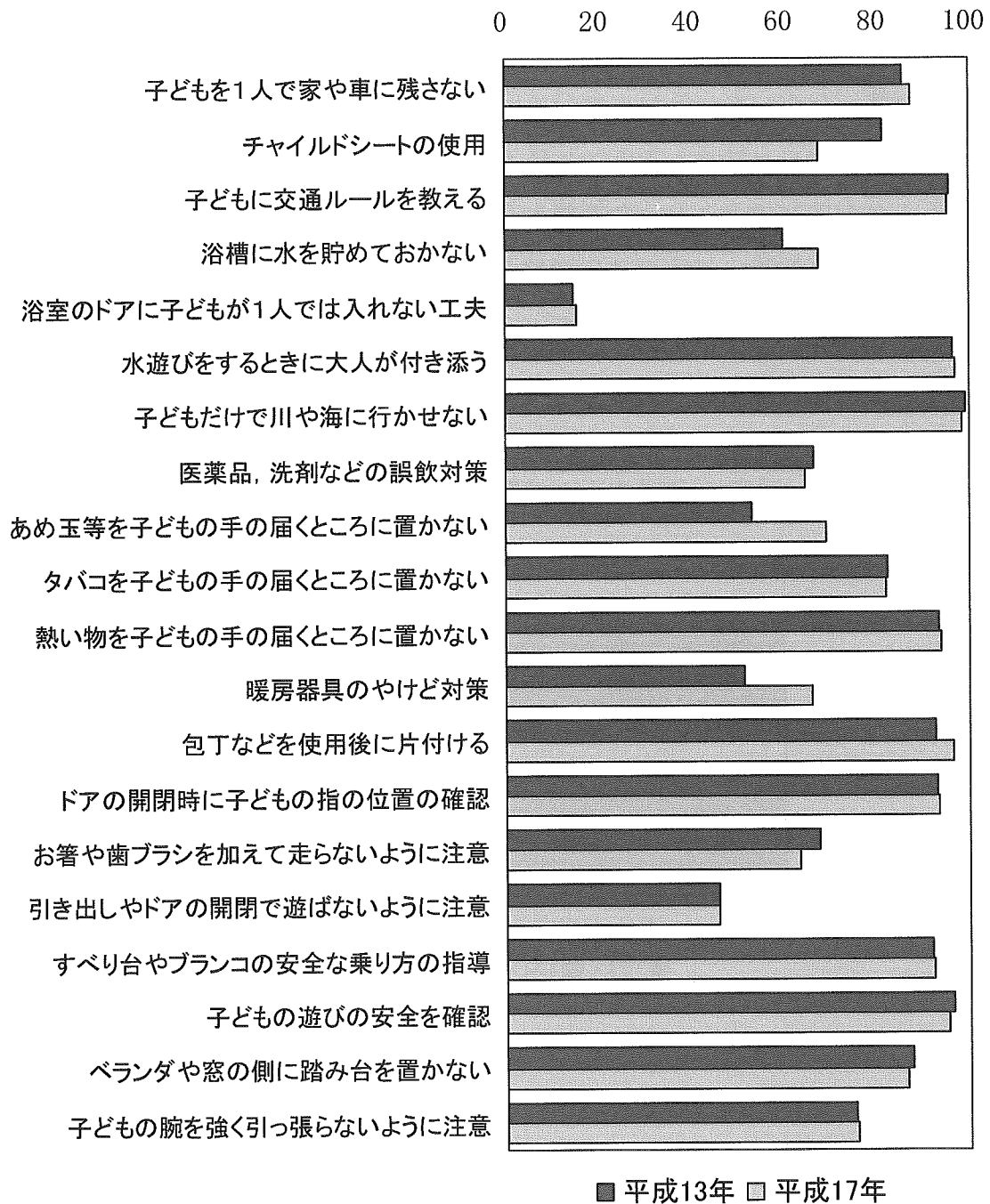




## 事故対策の実施状況（3歳児）

平成13年の調査結果と比較して、暖房器具のやけど対策と浴槽に水をためておかないという溺水対策、あめ玉などによる誤飲対策は実施率が改善していたが、チャイルドシートの適正使用は悪化していた。

事故対策の実施状況の推移（3歳児）



浴室のドアには、子どもが一人で開けることができないような工夫がしてありますか。

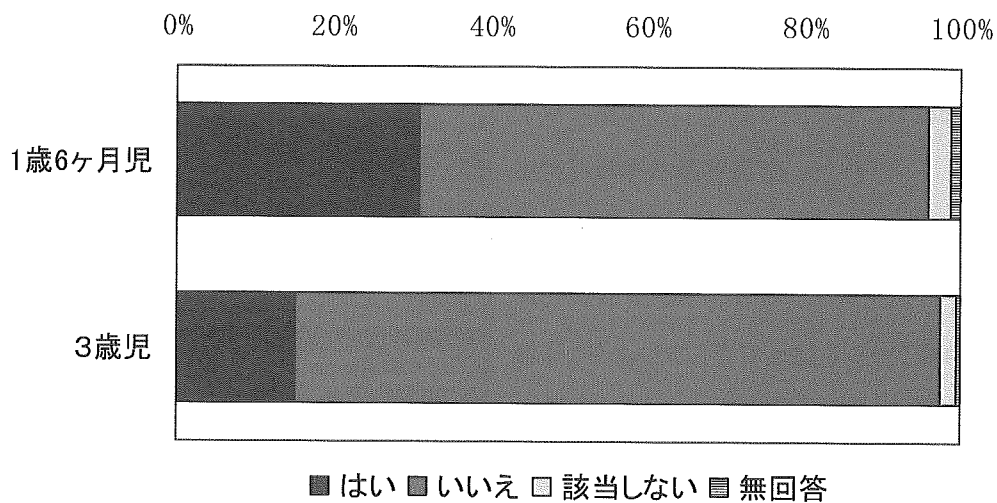
1. はい      2. いいえ      3. 該当しない

子どもが1人で開けられないように浴室のドアを工夫していると回答したのは、1歳6か月児で32.0%にとどまり、3歳児では15.1%とさらに低率であった。平成13年の調査結果との比較では、ほぼ同様な結果であった。

この事故対策が進まない理由として、賃貸マンションやアパートなどでは、無断での改造が困難であること、ユニットバスの増加に伴い、こうした工夫ができにくくなっていることが考えられる。ユニットバスの構造基準としてドアにチャイルドロックができることを検討するといった施策も必要であろう。

家庭における事故防止対策の評価指標として、20項目の事故防止対策をすべて実施している家庭の割合は現実的でなく、チャイルドシートの適正使用など重要な項目に絞って、その実施率を指標にすることが必要であろう。

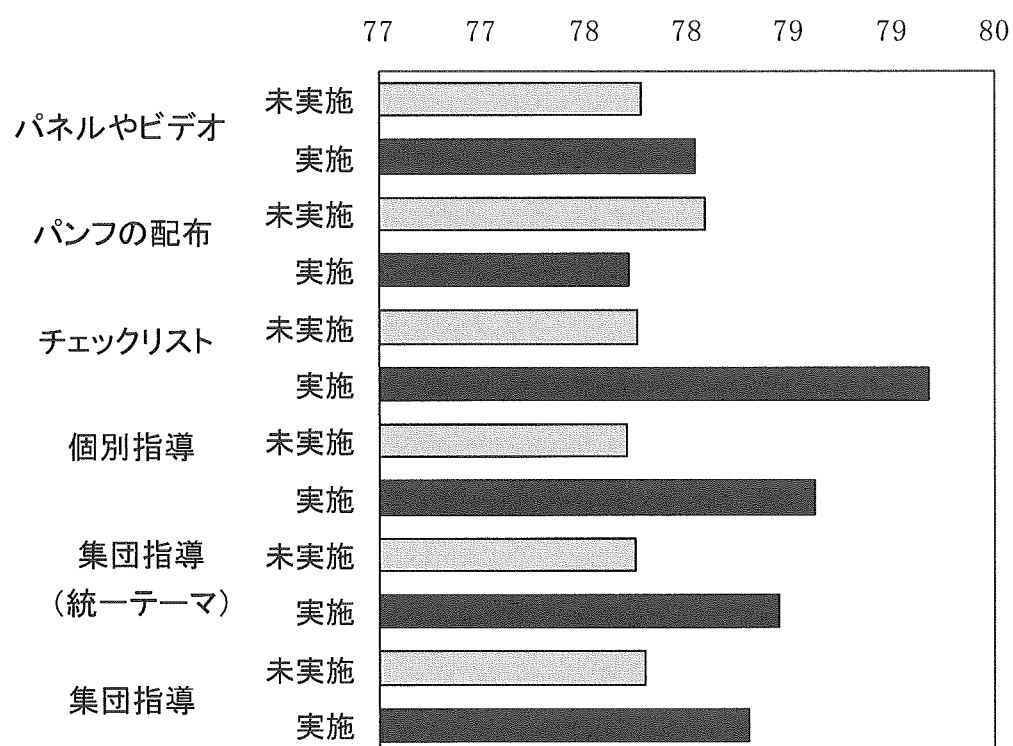
浴室のドアをひとりで開けられない工夫をしている



## 自治体における事故対策の取り組みの効果

自治体における1歳6か月健診の際の事故防止対策の取り組みと3歳児健診時点での事故対策の実施状況との比較では、チェックリストを用いて指導している自治体で最も事故対策得点（20項目全て実施できている場合に100点満点）が高く、ついで、個別指導を実施している自治体であった。健診会場でのパネル掲示やビデオの放映、パンフレットの配布は効果が乏しいと考えられた。

自治体の事故防止対策の取り組みと事故対策得点



## 中間評価及びモニタリングのための調査票

3, 4 か月児  
1 歳 6 か月児  
3 歳 児